

カップルの問題言及場面におけるときめき行為の効果に関する臨床心理学的研究

～ときめきの語用論～

心理臨床学専攻 坂口 由佳

<問 題>

I. 家族療法の基本的枠組み コミュニケーション論とシステム論を理論的基礎においている。

II. システム理論 ベルタランフィ(1968)はシステムを“相互作用の関係のうちにある諸要素の複合体”と定義している(若島,2002)。本論では、長谷川ら(1996)のシステム理論に依拠する立場をとる。システムの性質として、全体性、変換性、自己制御性という3つがある。(全体性:「全体は部分の総和ではない」,「変換性」:外的な条件の変化に合わせてシステム自体を変化させる能力。「自己制御性」:システムに問題が生じたとき、システム自体で解決しようとする動き。)

III. 変化の理論と家族療法 第一次変化とは、システムの内側で生じるもので、第二次変化とはシステムそれ自体の変化をいう。システム理論の視点によると、第一次変化はシステムの自己制御性に、第二次変化は変換性に関連している。第一次変化が問題を維持してしまう可能性がある。問題が維持されるシステムにおいては対処行動自体が、問題を支える悪循環となっている可能性がある。

IV. コミュニケーション理論—人間コミュニケーションの語用論 コミュニケーション理論の最も重視しているものである拘束とは、「任意のメッセージ(情報)はそれを受け取るものの反応を一義的に決定はしないが、その選択幅を制限する」(長谷川,1991)モリス(1938)によると「語用論」とは記号(言語)とそれを使用する人間の関係の学、つまりある人の発言がどのように人の行動に効果があるのかを検討する学問である。「語用論」の視点からコミュニケーションを捉えているのが「コミュニケーションの語用論」。

V. 基礎研究が支えたコミュニケーション研究 家族療法の黎明期のコミュニケーション研究は、家族療法の基盤となる「ものの見方」や技法の発展に多大な影響を与えた。

VI. コミュニケーションのマネジメント的側面とその研究 コミュニケーションのマネジメント的側面とは、会話の内容(トピック)と比較的独立したコミュニ

ケーション行動のことである。介入課題を用いる家族療法の場合は特に、治療に対する抵抗が強い(石井ら,2005)。そこで、より小さいマネジメント的コミュニケーションへの介入が有効である。

<目 的>

I. 相互補完的な二つのシステム

①会話システムと対人システムについて 「会話システム」:「あたかもシステムとして見える、起点と終点を持つひとまとまりの即時的な会話の連鎖」。「対人システム」:「会話システムを含むコミュニケーションによって構成され維持される、あたかもシステムとして見える人と人との関係」

②本邦のコミュニケーション研究 システムの自己制御性に関する研究や変換性に関するさまざまな研究を経てよりミクロな視点によるコミュニケーション研究が発展した。石井(2007)の研究では、葛藤の場面で会話の内容に触れずに最低限会話を維持する「反応を示すうなずき」などのコミュニケーションを特定し、「ミニマル・マネジメント・コミュニケーション」と名付け、それを禁止することで問題解決の認識が高くなった。しかし、これらの研究では会話ストレス度も上がった。

II. ときめきとは 本論では、葛藤的な場面においてシステム自体に変化を促し、問題解決のために、ときめきの力を活かせるのではないかと考える。いつもの問題の維持されている状況の中でときめきの力は絶大な力を発揮するのではないだろうか。「語用論」とは、言語・非言語・役割・雰囲気などを全て含めた広義のことだが、人の行動に与える影響についての研究領域のことを指す(石井,2005)。本研究では、「ときめき」を、ことばとして考え、“人間の行動に影響を及ぼすだろう”という観点から捉える。これを「ときめきの語用論」と呼ぶ。本研究では、「ときめき」を「対人システムを求心的方向へと拘束する感情」と定義する。

III. 本研究の目的 先行研究の結果より、臨床場面ではより心理的負担の小さな介入が求められていることは明白だろう。そこで本研究では、心理的な負担をかけずに問題を維持するコミュニケーションを阻止でき、問題解

決につながるような“ことば”として、ときめきを検討したい。

本研究では、カップルを対象とし、とりわけ恋愛関係にある二者間における“ときめき”の感情／行動を語用論的視点から捉え、“ときめき”の力が葛藤的会話システムにどのように影響するのかを検討し、以下の仮説を検討する。

＜仮 説＞

①ときめきが生じると、生じない場合と比較して、問題がより解決に向かうだろう。②ときめきが生じると、生じない場合と比較して、葛藤的コミュニケーションがより求心的になるだろう。③ときめきが生じると、生じない場合と比較して、会話ストレス度が下がるだろう。

＜方 法＞

I. 被験者 交際している男女カップル12組。

II. 実験手続き 実験の内容と会話場面をビデオカメラで撮影する許可を求め、了承の上実験に参加してもらった。被験者には別々の部屋で質問紙記入後、被験者には以下の3つの対話課題を行い、各会話後に別室で質問紙に答えてもらった。

統制条件 既存の統制課題リスト(菅原,2004)を提示し、被験者カップルがいつもしているような会話を10分間してもらった。

問題条件 被験者によって書かれた問題の中から実験者がランダムに1つを選択、被験者に15分間話し合ってもらった。

ときめき条件 ときめかせるリストを提示、無作為にカップルのどちらか一人に、別室で会話中に交際相手をときめかせてもらうようお願いし、問題条件のときとは別の問題について15分程話し合ってもらった。

III. 実験場面の構成 両者は約1メートル離れた椅子に対面式に座り、一方の横に鏡、もう一方の後方にビデオカメラを設置し両者を撮影する。

IV. 質問紙の構成 ①フェイスシート・関係の持続の意思(操作チェックに用いる)②会話ストレス度尺度(石井,2007):6段階評定。(操作チェック)③問題話題リスト(石井,2007):6段階評定④問題解決度尺度(石井,2007):問題解決の認知について6段階評定⑤会話変化尺度:変化について(良・無・悪)・どのくらい変化したように感じたか、6段階評定⑥ときめかせた人に対してのみの質問項目:負担尺度(6段階評定)・何をしたか⑦自由記述:変化について・感想など

V. 分析

＜分析対象のデータ＞実験設定への慣れを考慮し、各条

件の会話が始まってから3分経過後からの2分間。ときめき条件についてはときめかせてからの2分間。

＜発話単位＞発話単位基準は伊藤(1991)に基づき、「いわゆることばを発しているもの。相槌や感嘆を表す言葉も含む。笑い声やため息などは除く。同一の人が続けて話す場合は1秒以上の沈黙を区切りとする。」と定義する。

＜コーディング＞伊藤(1991)、中川・小林(1995)の定義を参考に以下のコミュニケーション行動を分析対象とする。

①沈黙 ②うなずき反応を求める頭の動き ③反応を示すうなずき ④視線の方向付け ⑤笑顔 ⑥笑い声 ⑦間投詞 ⑧反応を求める言語 ⑨反応を示す言語 ⑩疑問終助詞

＜結果と考察＞

I. 操作チェック:1)関係の持続性 全てのカップルにおいて交際継続の意思があることを確認。2)会話ストレス度 実験の不備等の理由で、8組を分析対象とした。統制条件と問題条件についてt検定を行なった結果、有意差が見られた($t(15)=-2.57, p<.05$)。問題条件では統制条件に比べて有意に得点が高かった。

II. 仮説の検証:1)仮説1についてt検定を行なった結果、問題条件の得点とときめき条件の得点に有意傾向が見られた($t(15)=-1.83, p<.10$)。仮説1は支持された。問題について話し合う場面において「ときめき」を用いることは、問題解決の認知に有効であるだろう。2)仮説2についてt検定を行なった結果、笑顔のみに有意差が見られた($t(15)=-3.24, p<.01$)。仮説2は支持されなかった。ここでの笑顔が自己制御的な性質を持つものとは違う可能性が考えられる。3)仮説3について 会話ストレス度について問題条件とときめき条件を比較。t検定の結果、有意差は見られなかった($t(15)=1.38, n.s.$)。仮説は支持されなかった。ときめきについての検討は、より負担の少ない介入を生み出す一助となるだろう。

III.探索的分析

1. ときめき条件における変化の認知について カイ自乗検定を行なった結果、 $\chi^2=9.88$ ($df=2$)、1%の有意水準で差があった。ときめきを用いることによって良い変化がもたらされる可能性が高いことがいえる。

2. 沈黙について t検定を行なった結果、沈黙に有意差が見られた(沈黙: $t(15)=-6.30, p<.001$)。ポジティブな意味を持つ沈黙が生じたと考えることが妥当だと言えるだろう。